『真實心』第二十九集平成19年度2008年3月発行（京都光華女子大学）

まえがき

本誌の表題『真実心』は、本学の校訓である。「真実心」は、われわれの求めるべき心であろうと直感はする。しかし、その内容は、いささか抽象的で深遠なるがゆえに、理解しにくいものであることも否めない。出典が、親鸞聖人の文献であることは間違いない。そこで、本誌所載の拙稿と重複するが、その文献操作によって「真実心」の意味を明らかにしておきたい。

まず、『浄土文類聚鈔』に次のような文言を見る。

今この心はこれ、如来の清浄広大の至心なり、これを真実心と名ずく。至心はすなわちこれ大悲心なるがゆえに、疑心あることなし。

つまり、真実心とは大悲心である。

また、『教行信証』（「信巻」）に引用されている『涅槃経』の文言には次のように出

る。

真実というはすなわちこれ如来なり。如来これすなわち真実なり。

真実とは、如来、仏である。これに「心」をくわえれば、真実心＝如来（仏）心となる。それでは、如来（仏）心とはいかなる心か。『仏説観無量寿経』につぎのような文言がある。

仏心というは大慈悲これなり。無縁の慈悲をもってもろもろの衆生を摂す。

したがって、真実心とは大慈悲のことである。

このようにして、「真実心」とは、「慈悲心」であると文献の上から明らかになる。そして、その慈悲心は、もろもろの衆生を摂するものであることも所引の文献で明らかである。慈悲の心とは摂取不捨の心である。

摂取不捨については、親鸞聖人が次のように仰せられている。

おさめ　とる　ひとたびとりてながくすてぬなり　せふはもののにぐるをおわえとるなり　せふはおさめとる　しゅはむかへとる

慈悲は、英語で compassion があてられる。これは、苦を共有する、の意である。

相手の立場に立って考え、行動し、相手の苦を、さらには楽をも共有することに他ならない。

それでは、このような真実心＝慈悲の心は、どこから発生するのであろうか。それは、私という存在への深い内省に基ずくといえる。私は、時間的空間的に、目に見えるもののみならず見えないものまでも含めて、一切のものとのかかわり、関係性の中にしか存在しえない存在である。すなわち、縁起的存在でしかない。そこに、私が私の努力で成り立っているが如き錯覚、傲慢さは否定される。無我なる存在である。しかし、これは、自己存在が無とされるものではない。他との関係性の中に生かされた存在としては有である。そこに、本質的に自他平等、自他が区別されるべき存在ではないことがわかるから、苦しむものがあればそれを摂してゆかざるをえない心が生まれる。

本誌に収録されているものは、本学主催の「宗教講座」における講話である。本誌の読者が、これら講話をお読みくださり、慈悲の心を理解され、日常生活の中に活かして下さらんことを念ずる次第である。それこそが、現今の社会の荒廃した人心を救

う一助となればと願わざるを得ない。

京都光華女子大学・
同短期大学部
学長　一郷正道